Osaka University Knowledge Archive

Title	言語文化学 Vol.20　編集後記
Author(s)	山本, 佳樹
Citation	大阪大学言語文化学. 2011, 20, p. 138-138
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77800
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

編集後記

『言語文化学』第 20 号をお届けいたします。今号には論文 29 編の応募があり、提出された 18 編のうち、厳正な審査の結果、10 編を採択することとなりました。ご多忙中にもかかわらず論文の査読をお引き受けいただいた先生方には、この場をお借りして厚くお礼申しあげます。

また、学会活動として、第 37 回大会（6 月 26 日）、第 38 回大会（10 月 28 日）を開催しました。第 37 回大会には 4 名の発表者がありました。また、言語社会学会との共同開催 3 年目となった第 38 回大会には、言語社会学会から 7 名（6 組）、言語文化学会から 5 名の発表者があり、3 会場での研究発表会となりました。いずれの大会も、活発で有益な議論の場となったことを、嬉しく思います。

学会運営に関しては、9 名の教員委員（石川弓子先生、大森文子先生、越智正男先生、川喜田敦子先生、郡史郎先生、アレクサンドル・ディボフスキー先生、アンドリュー・村上スミス先生、山本、渡邊伸治先生（五十音順））、6 名の学生委員（許寧霄さん、呉沛珊さん、中橋真穂さん、潘英峰さん、森永恵理さん、李娜さん（五十音順））、2 名の事務補佐（家村雅子さん、中井啓子さん（五十音順））という委員会スタッフが担当しました。不慣れな委員長を支えてくださった委員会のみなさまに感謝いたします。とりわけ、学会事務を一手に引き受けてくださった助教の石川さんの、きめこまやかで正確なお仕事ぶりには、いつも頭がさがる思いでした。ありがとうございました。

私事になりますが、およそ 20 年前、言語文化研究科の初代助手のひとりであった私は、言語文化学会の創設に立ちあいました。ほかの諸学会を参考にして、会費の額を考えたり、会則を作成したり、というところから始まり、『言語文化学』の創刊にこぎつけたときの喜びは、いまでも忘れられません。言語文化学会の委員になったのはそれ以来でしたが、この間に、歴代委員の方々のご尽力により、委員会の仕事がきわめて緻密に整備されていることに感嘆しました。委員の役割分担や原稿提出の規定など、これまでに蓄積されたさまざまなノウハウが随所に生かされており、委員会運営のルールが進化していることがよくわかりました。それをふまえて、本年度も、わずかながら、学会運営の合理化を図りました。

『言語文化学』も 20 号を迎え、「成人」となりました。言語文化学会の今後のますますの発展と成熟を、会員のひとりとして、心から祈っています。

2011 年 2 月

大阪大学言語文化学会委員長　山本佳樹